

レバノンから

明日に希望を つなぐ



シャティーラキャンプにある補習クラスのアイハム先生はシリアからの避難民の一人です。シリアでは国連の学校で教えていましたが、内戦のため、再難民としてレバノンに逃れてきました。先の見えない避難生活への不安を感じ授業に集中できないこともあったそうです。

子どもたちに不安を感じさせないよう、気丈に振舞わなければならない大人の気苦労は計り知れません。「シリアは平和をとりもどし、故郷に帰れる日が必ず来るからそれまでレバノンで頑張ろう」と子どもたちに伝える先生自身、その言葉が気休めにしか感じないことがあります。それでも、現在の境遇において精一杯の努力を継続することの重要性を子どもたちに伝えたいのです。

先生は、1年ほど前に両親、兄妹、奥さんと一緒にシリアのヤルムークという大きなパレスチナ難民キャンプからレバノンに避難してきました。そして、この5月にレバノンで第1子が生まれました。娘さんが生まれた後、アイハム先生は避難民としての現実を受け入れようと考えました。現状と正面から向き合うこと、「失った未来」ではなくここから構築でき

る「新たな未来図」を描くこと。守るべき新たな命のために、そして避難先で出会った多くの子どもたちのために「父親」として頑張っているのです。

シャティーラキャンプは1949年に建設されて以来、これまで7度も攻撃を受け破壊と再建を繰り返してきました。そのたびに立ち上がってきた「子どもの家」のセンター長ジャミーラさんは「私たちは他に行くところがありません。無いものや失ったものに対していつまでも嘆いていても仕方ありません。今おかれている環境で幸福を見つけ、前を見て生きていくしかないのです。アイハム先生の娘さんは、悲しみに沈む家族に明かりを灯してくれましたね」

と語ります。

現場にいと、私たちの力ではどうにもならないことに直面する機会が多く、もどかしさを覚えることがしばしばあります。5月にレバノン政府が表明したシリアからのパレスチナ人入国制限もその一つです。突然の入国制限のため、家族と離れ離れになったケースが多く報告されています。

シリアからレバノンに逃れてきた避難民は100万人を超えるとされる中、その1割にも満たないパレスチナ人のみが、なぜこのような制限を受ける必要があるのでしょうか。……もう何十年も「パレスチナ人だから」という理由でこのような不正義にさらされています。

どうしようもない現状を前にしても立ち止まることなく「明日」に希望をつなげている人たち。子ども支援は、彼らの「明日」を築くうえで重要な事業です。子どもたちが自らの努力で将来を手にするように、そして平和を手にするように、新しい世代の子どもたちに教育の機会を提供しています。

私たちにできることは非常に限られていますが、ゼロではありません。「何か自分にできることをしたい」という日本の皆様の支援がレバノンのパレスチナ難民キャンプの子どもたちに希望を与えています。

(バイルット)



レバノンで、ワールドカップのテーマソングとしてよく耳にする『セラヴィ(これが人生)』。2012年にアルジェリアの歌手シェブ・ハレドによってリリースされました。民主化が中東・北アフリカに広がる一方で、混乱が生じ多くの人が犠牲になっています。こうした背景から、過去の

美しい思い出を語り、現在ある苦難を受け入れること、そして必ず全ての困難には終わりがあること、それが人生だと歌っています。6月、難民キャンプの幼稚園の卒園式で、この曲に合わせて子どもたちが踊っていました。未来をみつめる子どもたちの目に活気と希望が感じられ、胸が一杯になりました。